

# 我流子育て支援論 ～ 学童期 2～

かうんせりんぐるうむ かかし

河岸由里子

小学校後半になると、思春期、反抗期の問題も絡まって、親子関係にさまざまな影響が出てくる。今までは親の権威に従って、子どもたちが言うことを聞いてくれたのに、反抗的な言葉を吐かれて、親は戸惑う。いつまでも、可愛い我が子ではない。それが許せず、親の権威を守ろうと威圧的になったり、子どもの機嫌取りをして、親子の関係性が逆転したりなど、問題行動を生む原因が親子関係にあることが多くなる。

ここ 10 年の相談で増加傾向なのが、父母の離婚・再婚や、継父母との関係の問題である。子どもが小学校高学年くらいになると、ある程度手が離れてきて、親の気持ちも少しは理解できると思うのか、或いは、結婚して 10 年以上経ったあたりが一つの危機なのか、離婚や再婚の話が持ち上がる。

夫婦が離婚の危機にあるということは、

日々、冷たい空気が流れていたり、言い争いが絶えなかったり、或いは物が飛び交うような危険な雰囲気になっていたりなど、子どもにとってはとても穏やかな気持ちではられない状況になる。DVがあれば、当然虐待に当たるが、学校に行っている間に、「お母さんが居なくなってしまうのではないか」とか「お母さんが大怪我をするのではないか、いや、最悪死んでしまうのではないか」などといった思いの中で、子どもが不登校になる。そこまで酷くなくても、家族が壊れてしまうのではないかという不安の中で、腹痛や吐き気、頭痛を訴える。時には、嘘言やいじめ、暴力などの問題行動を起こして心の叫びを表現することもある。

継父母との関係で、虐待などの相談も増えている。継父母による暴言・暴力や性虐待、ネグレクトなど多々ある。児童相談所もてんてこ舞いだらう。

子どもの表面的な、行動上の問題だけを取り扱っても、夫婦・家族の問題が絡んでいる場合は、簡単に解決には至らない。父母ばかりではなく、祖父母の問題も入ってくると余計にややこしくなる。嫁姑の問題や、祖父母が母親の子育てを子どもの前で批難したりなどは最低だが、度々聞く。

我々支援者としては、子どもの問題行動の裏に、家族の問題が無いかを探る必要がある。学校では、「家族の問題には入らない」としている先生方もいらっしゃるが、そんな時代ではない。学校と保護者の境界は曖昧で、学校に保護者がこれだけ入ってくると、学校と保護者の境界は曖昧で、関わりたくなくても、家族の問題に巻き込まれることも多い。出来れば、繋がりやすい保護者から、家族の状況を聞き取り、その上で支援を考えねばならないことが多い。

以前関わった小学校高学年の不登校のケース。最初は子どもと担任の問題で、父母の担任攻撃、学校攻撃が凄まじく、モンスターのように言われていて、筆者がスクールカウンセラーとして間に入った。確かに父母の様子は、モンスターに近く、攻撃も酷かった。しかし、父母の精神状態にも問題があり、特に母親の状態が悪化していた。一緒に文句を言いに来る割には、夫婦関係も悪かったので、母親の気持ちに寄り添い、母親の頑張りを認めた上で、「休もう」という提案をした。母親が一人で実家に帰った途端に、本児は登校できるようになった。本児には発達障がい疑いもあったが、その後、母親が戻っても、中学で特に問題なく過ごせたと聞いている。

母親の精神的な問題が子どもに大きく影響した例だったが、このようなケースが増えている。特に男児と母親の関係性で、男児が不登校から引きこもりになり（と言うより、母親がそうさせている）、母親が人格障害系で病院受診も効果がなく、学校批判が強烈で、支援を悉く排除するケースに頭を悩ませることが増えた。将来を見据えたら、困るのは保護者なのだが、中々先まで考えられないし、人の意見も聞かない。どうやって子どもを助ければよいのか？

一応30日ルール(30日以上子どもが目視確認できない場合は、児童相談所に通告するというルールで、19歳の女性がずっと監禁されていた事件を受けて通達された)をたてに、遠くからでも子どもを目視できるようにしてもらったり、或いは、近所や友達などから、目撃情報が無いか聞くなどして、確認するようにしている。又、30日は守られなくても、虐待が疑われないケースでは、3ヶ月に一度でも確認できれば好しとしている。

この様なケースは、学校に行かせる義務を果たしていないし、一方的に学校や周りのせいにして、子どもを出さないのが、手を付けにくいのが、厳密に言えば虐待なのではないか。

保護者の精神的、人格的問題が子どもを引きこもらせているケースを虐待として認め、親権停止が出来れば、救える子どもが格段に増え、引きこもり防止に役立つと思うが余計なお世話なのか？ 明らかな虐待でも親権停止が難しいので、そう簡単にはいかないだろうが、法的根拠付けが早急に必要だと思う。

小学校で相談に来るのは殆どが女子で、

高学年女子では、その多くが友人関係のトラブルである。

女子はグループ化が激しくなり、グループに入れたい子やグループ内での“はぶき”、或いはいじめの問題などが起こる。

社会性が育ってくると3人の関係が持てるが、幼いと2人の関係に固執し、もう一人が加わることで起こる関係性の変化に馴染めず、意地悪をする子がいる。これは幼さゆえの問題で、昔からある。大人になりたい、大人にあこがれている子には、「3人の関係性を持てることが大人である」と言うのが効果的であろう。

しかし、大人になりたいと思わない子も増えているので、そういう子の場合、相手の立場になって考える練習をしてもらっている。練習を重ねるうちに、心の成長があり、3人での関係を持てるようになっていく。以前小学校6年生の娘で、仲良しの友達のを盗っては隠すことを繰り返す子がいた。本人は解離状態で全く覚えていない。絵を描かせると二人だけの世界を描く。束縛もここまで来ると病的だが、独占したいという気持ちは、離れてしまうのではという不安の裏返しであり、人間関係に不安を持っているからこそこの行動であった。この子の場合箱庭療法が効果的で、最終的には、新しい人間関係を築けるようになり終結した。

ところで、いじめの問題であるが、最近、更に巧妙で嫌なケースに出会った。

先生の前ではいじめないというのは普通だが、役割分担をして、A子が対象児童(C子)と仲良くし、B子がC子を見捨てる日があるかと思うと、翌日は役割が交代する。C子は、「A子は優しくして

くれるから、きっともう大丈夫なんだな」と思った矢先に、天国から地獄へまっ逆さまに突き落とされる。しかも、1日の中でも態度がコロコロ変わることである。

このような状態で、人を信じられるはずもないし、C子の傷つきは、生半可なものではない。人の気持ちを「弄ぶ」と言う表現が一番しっくり来る。こんな方法を一体誰が小学生に教えたのか？小学生が、大人のドラマを夜遅くまで見ている影響の一つではないかと思う。

小学生は、9時には寝るべきで、大人の時間と子どもの時間をはっきり分けるべきである。大人と子どもの境界の曖昧さが、子どもたちに大人の事情や行動パターンを伝達し、子どもたちの行動にその影響が出始めているということではないか。気をつけてみて行きたいものだ。

話がそれだが、前述のC子は、担任がA子、B子やその保護者側におり、C子の保護者を一方的に批難する。C子の特性である、真面目で頑張り屋の所が、思春期の他児からみたら「ウザイ」のだろう。しかし、保護者が心配して、先生にいじめの話をする、先生は「学級は何の問題もないし、C子も楽しく学校に来ている。お母さんがおかしい」と言うのである。C子は、地域外の中学校に行くことを検討しているが、なぜ、何も悪くないC子が逃げなければならないのか、理不尽さを覚えたケースである。学校と調整していきたいと思うのだが、保護者が仕返しを怖がって、筆者が学校に入ることを頑なに拒んでいる。何とか良い方法を考えて行きたい。

いじめの問題では、被害者が相談に来

ることが殆どだが、筆者は最初に「いじめは年齢や場所に関係なく、いつでも、何処でも起こりうる問題である」ことを必ず伝えている。その上で、いじめをしてくる人間は「ゴミ」みたいなもので、相手にしないのが一番であること、いじめを受けたら大きな声で「やめて」と言っ、周りの子に気づかせること、一人で居ないようにすること、本人は何も悪くないが死にたいほど辛かったら休むこと、「学校は命を懸けてまで行くことは無い」と伝えている。時には紙に米粒大の黒丸を書いて、手で叩き潰して見せることもある。いじめる側に立ち向かえない子どもの怒りを放出させる手立てである。怒りを抱えて暮らすことは辛いし、将来嫌な問題を引き起こしかねないので、小さいうちに処理しておきたい。

支援者としては、決して「いじめられる側が悪い」という考え方をせず、事実の把握に努め、被害者の気持ちを受け止めつつも、撥ね返す力を育てる努力をすべきだろう。

さて、次に問題となるのは、生徒指導用語(?)でピンク系といわれる子たちである。

小学生でも家庭環境や溢れる情報の影響もあって、早い子では異性に関心を持ち、援助交際に入る子もいる。栄養状態の良い現代では、身体的成長が著しく、小学校6年生では、高校生並の体格になっている子も居る。お化粧をしたら、いくつかわからないだろう。女子児童に対し、心と体を大切にすること、性病や妊娠について、懇々と、気長に話していくことと、家族関係に問題が無いかをよくよく注意してみることが支援者に求めら

れる。一度甘い汁(安易にお金を稼げる方法)を味わってしまった子は、簡単に元の状況に戻ってしまうので難しい。服装や持ち物、携帯やパソコンの使用状況、外出先や帰宅時間などに気を付けてもらうことが予防の第一歩だろう。

更に、小学校で大きな問題となるのは、発達障がいであろう。

発達障がいについては、特別支援教育事業が大々的に展開されるようになって、学級に支援員が配置されることも多くなった。発達障がいについての理解は、先生によって温度差が大きく、相変わらずのところもあるが、少なくとも診断を受けている子どもについては(もちろん地域格差はあるだろうが)、支援が随分と充実してきたように感じる。しかし、診断を受けていても、対応をちょっと間違えると、高学年では暴力など問題が大きくなる。

先日も、広汎性発達障がいの診断を持つA男が、子どもたちのからかいの繰り返しに対し、最初は「止めて」と言っていたが、遂に切れて暴力沙汰になった事例があった。

発達障がいの子どもは、高学年になると、からかいの対象になりやすい。健常児には反応が面白いのだろう。この事例では、健常児の方がするくて、そうやってA男を興奮させることで授業妨害している。しかし、先生の方は、A男の暴力を何とかしようと、健常児側を守る形で立ってしまったのである。

学校は「A男を病院に連れて行って、薬を飲ませろ」と言うし、A男は「僕は要らない人間だ。消えたい。死にたい」と言い出した。保護者は困って筆者のと

ころに相談に来て、「今まで問題なく過ごしてきたのに、何故急にこんな状況になったのかが理解できない、この子は特別支援学級に転校しなければならないのでは」と泣いていた。A男はIQも高く、普通学級対象であること、対応次第で変わるであろうこと、集団生活は、元々ストレスフルで苦手なこと、それでも信頼できる先生がいれば何とか頑張れることなどを伝え、学校とも本児への対応について筆者からも伝えてみたいというお話をした。担任が、健常児を抑えることで、A男は担任との関係を改善することが出来る。担任との関係がよければ、A男は学校を続けることが出来る。これから先、中学や高校でも、誰か一人信頼できる人がいれば、A男は頑張れるだろう。投薬については、医師の判断によるので、それは医師に任せるよう伝えた。

A男のような立場に追いやられている子の話はよく聞く。高学年では、子ども自体も自分の出来ないこと、他児と違うところに気づき始め、自己評価をぐっと下げてしまう。そんな時に、担任との関係が悪くなったら、子どもはただでさえ居心地の悪い集団の中で、益々居心地を悪くしてしまう。真面目な彼らはそれでも学校を休まないことも多い。そうして、何とか中学に進学しても、中学のいじめやからかいはもっと酷いことが多く、結局不適応を起こしてしまうのである。

高校生以上の発達障がいの人に聞いてみると、小学校高学年くらいからいじめられて、学校は地獄だったと言う子が少なく無い。小学校高学年での対応に気をつけること、発達障がいの子どもに、パニックを起こさせない、暴力行為に走ら

せない、自己評価を下げさせないことが、先生方はじめ支援者に求められる。そして発達障がいを十把一絡げに考えずに、個々のケースについて、その子の特性を、良いところをしっかりと見つけ、認め、伸ばしていくことを父母も先生方も、その他の支援者も意識してもらいたいと思う。

発達障がいで思い出したが、最近の先生方の言葉遣いが気になることがある。自閉系の障がいの子はよく「です・ます」調で、丁寧語を使う。そのため、先生の言葉を気にする子が結構いる。

発達障がいの子どもでなくても、小学校で、「お前」とか「あんた」とか、先生が子どもに使うのはとても聞きづらい。小学校では、出来るだけ正しい、綺麗な日本語を使ってもらいたいと思っているのは筆者だけだろうか？また、先生方に対し、あだ名やニックネームで呼ばせるのもおかしい。その延長で、先生が先生らしくなければ、尊敬は生まれえない。先生方も「教育者」としての自分自身の態度、言葉遣い、服装など、よくよくチェックして欲しいと思う。

話がそれだが、もう一つの大きな問題が学級崩壊である。

学級崩壊では、ごく一部の子どもの問題行動をコントロールできず、注意しても聞かない中で、どんどん問題行動が広がり、その中に発達障がい系の子が混ざっていることが多い。先生方の対応にメリハリがあると、あっという間に変化するのを何度も見てきた。大きな、通る声で短く叱り、一方で問題行動をしている子を中心に、お手伝いなどさせ、上手く褒め、認めていくのがコツだろう。

昔から、「飴と鞭」という言葉があるが、今では鞭は打てないものの、「しっかり叱る」ことは、「褒める」という飴と一緒に使うことで効果がある。飴だけでも、鞭だけでも上手く行かない。これは、子育て全般に言えることだと思う。

上手く学級をコントロールできないことで、焦り、更に悪い循環にはまって、鬱になった先生を何人か知っている。何とかしようと考えているのだろうが、これが小学校だから難しいのである。担任は一人で何とかしなければ、先生としての評価が下がるとして追い詰められる。目の前に、問題が山積することで、先が見えない、出来ることも出来ない状況が繰り返される。こんな時こそ、大きく視点を変えるために、外からの助言が効果的だろう。スクールカウンセラーにも相談が出来るのも良いと思う。

他にも、ゲームの問題や、不登校の問題もあるが、この時期からのゲーム中毒は、保護者の力がないと改善できないし、不登校も同様である。保護者の力、父母の協力が強化されるような支援が必要になる。

リストカットの問題も高学年になると出てくるが、これは明らかにテレビや情報の弊害だと思う。

虐待では、先生方と子どもの良好な関係性が、早期発見に役立つ。性的虐待なども高学年では起こりやすいので、要注意である。虐待を発見したら、通告義務があるが、学校が二の足を踏む場合も度々ある。躊躇せず、まずは通告してほしいものである。

最後に小学校を総括してみたい。

小学生と言う、まだまだ子どもとして、自由に過ごせるはずの時代に、目立たないように、誰かの批難を浴びないようにと、黒子の様に、じっと影を潜めた生活を続けている子がいる。その子の青年期が一体どうなるのか？考えるだけでもゾットとする。

せめて小学校までは、子どもは子どもらしく過ごさせてやりたい。その為に、学校も保護者もその他の関係者も知恵を絞りあうべきだろう。物が無い中で、人と人がコミュニケーションしながら遊びを作っていく、そんな練習を出来るのも、小学生までだろう。そこらに生えている植物、石ころ、何でも遊びの道具になるのである。木を登ったって良いではないか。木を登るには技術がいる。手足の使い方、どこに足を掛けるか、どの枝が登りやすいかなど頭と体を使える。小さい川で、横エビや小魚を捕まえるにはどうしたらよいか。昆虫を捕まえるにはどうすればよいか。子どもたちは、友達の知恵をもらったり、工夫したりして、覚えていく。都会では難しいかもしれないことも、地方に行けば体験可能だ。虫をみて、キャーキャー騒ぐ子を増産してどうするのか？昆虫が生きられる環境は、それだけ自然だということではないか？まあ、ゴキブリは除外したいが・・・。

授業でも、子どもたちの描いた絵を見て驚くことがある。写真を使った写生や、構図まで決められるような絵画指導では、創造性など育たない。うまく描ければよい、なんでもそつなくこなせればよいという教育ではなく、個性を伸ばす教育が発達障がいを持つ子にも、健常児にも必要だと思う。それは、決して「ゆとり教

育」という考え方を意味しない。〇×式や、選択式の問題ばかりではなく、個々人の意見を反映し、失敗も認め合う教育がもっと必要だろう。小学校で自分の意見を言えるようにしておかないと、中学高校ではもっと言えなくなるだろう。

そして、大人と子どもとの境界、先生と生徒の境界、学校と家庭との境界を今一度見なおし、はっきりさせるべきと思う。その境界を意識したうえで、保護者が学校に協力し、子どもたちの知識、人間関係、心の発達のために、知恵を絞り合う関係が出来れば、今ある学校での多くの問題は解決できるのではないか。

次回は中学生について書いてみたい。